サビエル生誕五百年
巡礼の道
597

藤屋 侃士
（下松市幸ケ丘）

絆（きずな）を育む？
～今をどう生きる～

前々回、「高校を卒業して60年」と題して書いた。山口高校を卒業して60年の節目になるので、特別に東京の同期会に初めて参加した感想である。

その同期会から数週間過ぎて、全体の同窓会誌「熱球」が送られて来た。そこには東京での同期会の様子が詳しく報告されており、虫眼鏡を使いながら時間をかけて読んだ。

同窓会はややもすれば過去を懐かしむだけに終わり勝ちだが、この同窓会誌のおかげで一過性の出来事に終わることなく、過去との絆を育むことにより、今も自分の中に生き続けていることに気付かされる。

思い出が凝縮する同窓会誌

レターパックで送られて来た117㌻からなる分厚い同窓会誌。連絡メモには「同期生各位」とある。幹事に先日の同期会参加者44人に送ったのかと聞くと「いや、同期会に欠席した人にも連絡があった人にも届けた」という。

その数合わせて69人、その手間たるや相当なものになる。改めて、絆を育んでくれた幹事に感謝の電話をした。

「絆とは育むものだ」と思い、絆の語源を調べてみると「犬や馬の家畜を通りがかりの立ち木につないでおくための綱」のこと。人と人との結びつき、支え合いや助け合いの意味を指すようになったのは、比較的最近のこととある。

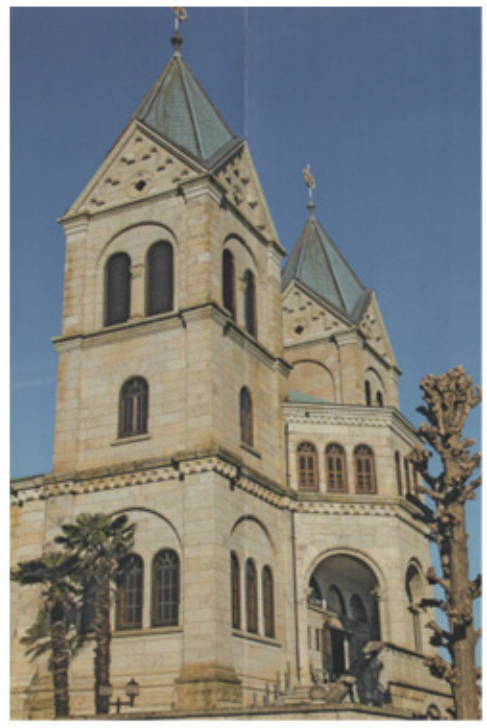
友人との絆、夫婦との絆、それは双方が育む努力をしてこそ、より強い絆に発展するものだろう。利己主義、個人主義、使い捨ての現代社会において、欠けているのは「育むこと」ではないだろうか。

そう言えば、先日、埼玉に住む大学時代の友人から郵便物が届いた。2泊3日で、大谷石で有名な宇都宮を訪れ、大谷石で建設された「カトリック松が峰教会」を見つけたという。

私がカトリック信者であることを思い出し、松が峰教会にあった数々の資料をわざわざ送ってくれたのである。これも友情の育みであると思う。

12年にわたり書き続けているこの「巡礼の道」は、私の努力で続いていると思われ勝ちであるが、決してそうではない。友や家族との絆という支援があるからこそ続いているのだ。

また、この巡礼の道が新聞に掲載されることに電話を下さる老婦人がいる。この絆も私に書き続ける励ましを与えてくれる。


絆で知った大谷石の教会

いろんな出合いを育む中で生まれる絆。それは過去のものでも、未来のものでもなく、今を生きる自分に糧を与えてくれている。

そして絆は人との直接的な交わりだけでなく、音楽、文学、言葉などを通しても、今の自分に力を与えてくれる。

先日、ピュリツァー賞を受賞したアメリカのラッパー、ケンドリック・ラマー。彼がラップと合わせて歌う歌詞に共感する。貧しい、暗い過去の中を生きぬいた彼は、それを受け入れ、「今、大丈夫」と歌い続ける言葉に哲学的なものさえ感じる。

それはノーベル文学賞を受賞したボブ・ディランの「風に吹かれて」の詩の言葉とは違った、言葉の絆への共鳴を覚えたのである。それは同窓会や友人との絆とは、全く異なるが、自分には共に今を生きる糧になっていると思えるのだ。